

グラスルーツグローバルイゼーション  
—草の根・地域からの地球一体化推進—

広田秀樹ゼミナール

07E051 ラブダンスレン＝エルデネバト  
08E008 王慧  
08E034 高橋健幸  
08E047 本間圭  
08E048 松永貴幸



## 目 次

はじめに .....	II-122
1. Study .....	II-124
1.1 グローバル化とは何か .....	II-124
1.2 グローバル化の発展過程 .....	II-124
1.3 1980年代以降本格化するグローバル化 .....	II-124
1.4 グローバル化の恩恵 .....	II-128
1.5 グローバル化が引き起こす問題 .....	II-129
1.6 グローバル化の平和的ランディングの手法としての グラスルーツグローバリゼーション .....	II-130
2. Invite .....	II-131
2.1 中国人料理家ショウコウレイ氏を招待 .....	II-131
2.2 フィリピン人エンターティナー ポール＝イルデファンソ氏を招待 .....	II-136
2.3 アメリカ人ビジネスパーソン スコッティ＝ジロッド氏を招待 .....	II-139
3. Visit .....	II-145
3.1 ニッコーインターナショナル主催の「オクトーバーフェスト」へ参加 .....	II-145
3.2 長岡市国際交流センター「地球広場」を訪問 .....	II-147
4. Donate .....	II-150
おわりに .....	II-151
謝辞 .....	II-152

## グラスルーツグローバリゼーション

### —草の根・地域からの地球一体化推進—

#### はじめに

昨年度広田ゼミナールでは、「長岡市における多文化共生社会の実現」というテーマを掲げ、グローバリゼーションの潮流の中で、長岡市に縁あって来られた外国籍市民の方についての実態調査を中心としたゼミ活動を行った。今年度、4年生1人、3年生4人という新しいゼミの編成になり、地域活性化プログラムの活動を、どのように進めていくべきかについて、4月に議論を開始した。

その中で、昨年度同様にグローバリゼーションという歴史的潮流に関連したテーマを設定して、グループワークを行っていききたいということになった。ただし、昨年度は「調査」にウェイトをおいた活動であったのに対して今年度は、「アクション・具体的行動」にウェイトをおいた活動をしていききたいというのがゼミ生の思いであった。

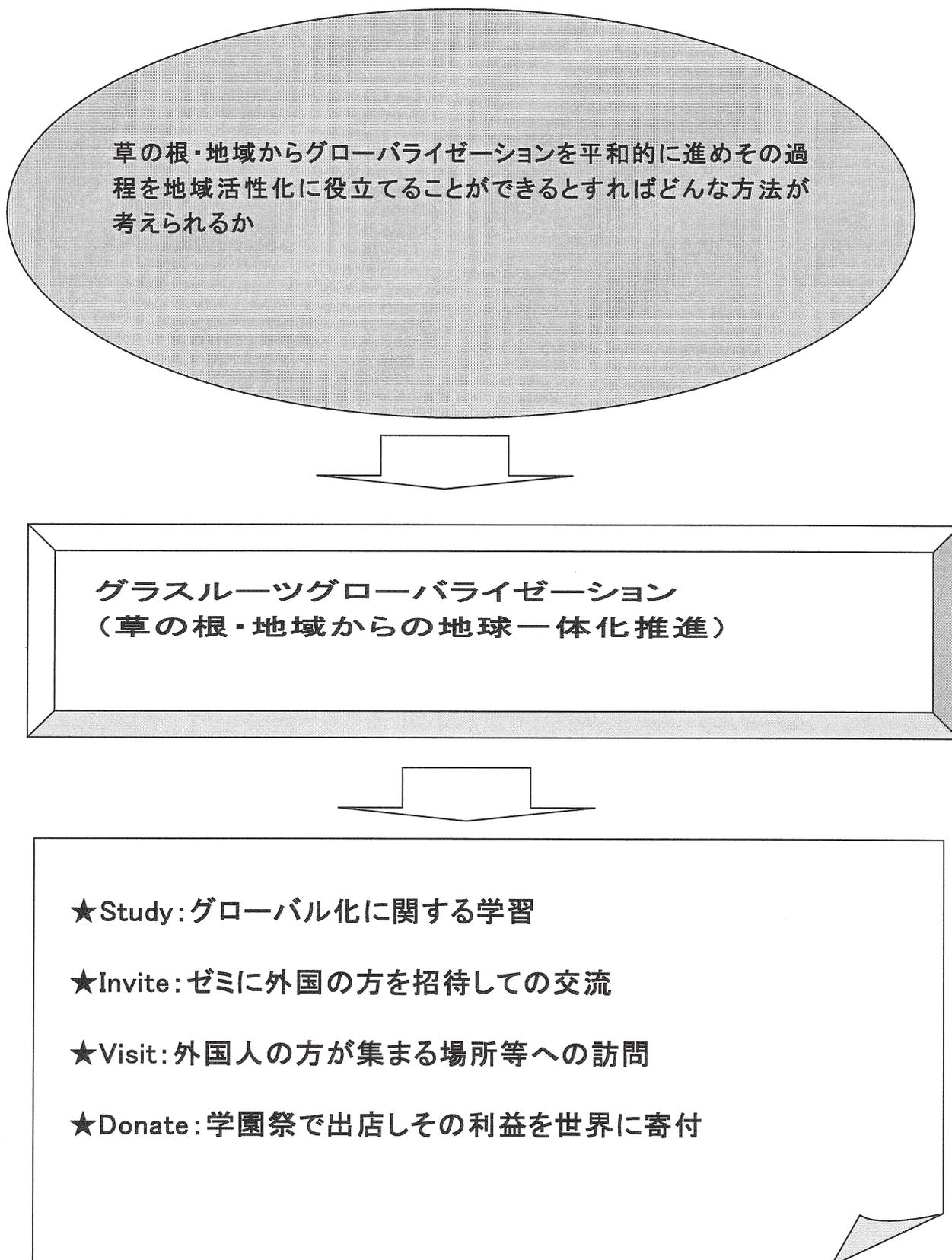
議論が進む中で、ゼミ生の問題意識が「現在、急速に進むグローバル化の潮流と、地域で生活する私達の間をどう考えるべきか。草の根・地域からグローバル化を平和的に進め、その過程を地域活性化に役立てることができるとすれば、どんな方法が考えられるか」という一点に、集中していった。

そして、「グラスルーツグローバリゼーション」(草の根・地域からの地球一体化推進)というキーコンセプトが生まれた。グラスルーツグローバリゼーションというコンセプトを軸に、グローバル化を草の根・地域から平和的に推進していこうということになった。しかし、グラスルーツグローバリゼーションというテーマ自体が、ゼミ生にとっては、やや遠大であり、具体的にゼミ活動をどう進めていくかに関しては、当初かなり当惑してしまった。

さらにディスカッションを進めた結果、具体的なゼミ活動については、「とにかく自分たちの身の丈から、できることからやってみよう」ということになった。そして以下の、4つのことに挑戦することになった。

即ち、第1に、グローバル化に関する学習 (Study)、第2に、ゼミに外国の方を招待しての交流 (Invite)、第3に、外国人の方が集まる場所等への訪問 (Visit)、第4に、学園祭で出店しその利益を少しでも世界に寄付し支援する (Donate) である。5月から、グラスルーツグローバリゼーションの具体的活動として、Study・Invite・Visit・Donateを進めていくことになった。

図1：コンセプト「グラスルーツグローバルイゼーション」と「具体的アクション」の考案



## 1. Study

5月から毎週のゼミで、グローバル化に関する学習を開始した。皆で、グローバリゼーションに関する様々な資料を持ち寄り、グループディスカッションを行っていった。以下のように、私達はグローバル化に関する知識を整理していった。

### 1.1 グローバル化とは何か

グローバル化とは、英語では **Globalization**、日本語では「地球一体化」、中国語では、「全球化」である。グローバル化とは、経済、情報、政治、文化、人々の意識などあらゆる点で、世界的交流が盛んになり、世界全体が一体化していく人類史における画期的な潮流である。今後、グローバル化のトレンドは間違いなく、急速に高度化する。

### 1.2 グローバル化の発展過程

グローバル化の発展過程に関しては多様な説があるが、私達は次のようにグローバル化の発展過程の理解をまとめてみた。

1800年代から1900年代初頭にかけて、世界では国家 (**nation-state**) が急速に形成され、やがてその潮流は、国家第一主義とも言える国家中心の時代にまで高まっていった。そしてそれは、第1次世界大戦、第2次世界大戦という国家が激しく衝突する極点に達した。

1945年以降、極端な国家第一主義を抑制する方向で、国際協調主義が発展した。そして国際協調主義を具現化する制度が構築されていった。その代表的なものが、国際連合 (UN)、国際通貨基金 (IMF)、世界銀行 (The World Bank)、関税と貿易に関する一般協定 (GATT) 等である。人類史において、単純な国益を超えた世界共通の利益を指向するトレンドが本格的に出てきたと言える。

それでも、1950年代、60年代、70年代と、世界は大枠で、アメリカを中心とする自由主義圏、ソビエトを中心とする社会主義圏、また、アフリカ・アジア・中南米の相対的貧困エリアを中心とする第三世界に分断され、地球一体化、グローバル化とはとても言えない状態が続いた。当時世界の多くの人々は、このような基本的に分断された世界体制が半永久的に継続するものと考えていた。

### 1.3 1980年代以降本格化するグローバル化

私たちは1980年代の国際政治の変化に、本格的なグローバル化への突破口があったとし注目した。

1981年にアメリカでレーガン政権が誕生した。レーガンの基本スタンスは、力による平和 (**Peace through Strength**) という、国際政治学者アルバート＝ウォルステッター等に影響され形成されていった世界戦略を基盤としていた。レーガンは、圧倒的な、軍事力、技術力、諜報力、経済力、メディア力、文化力などの **Power** を最高度に高め、社会主義圏

を圧倒していく戦略を展開した。

レーガン政権の第1期は、すさまじい軍事拡大が行われた。即ち、中距離核ミサイルパーシングⅡのヨーロッパ配備、MXミサイルの製造、ついには、宇宙空間から敵対国のミサイルを捕捉し破壊するといういわゆるSDI (Strategic Defense Initiative) 構想まで、打ち上げた。

特に、SDIは、それまでの、MAD (Mutual Assured Destruction : 相互確証破壊) という、米ソの核抑止力論、つまり、戦略核兵器は現実には使えないという国際政治理論自体を止揚する可能性を有するもので、当時のソビエトの指導者層に大変な脅威を与えた。また、レーガンは、イギリスのサッチャー政権、日本の中曽根政権、ドイツのコール政権等と、強い同盟関係を構築し、外交ネットワーク上でもソ連を包囲し追いつめていく。

レーガン政権の力で圧倒する戦略に、1980年代前半、ソ連も当初、軍事戦略、外交戦略で対抗した。しかし、その過程で、不思議なことに、ソビエトの最高指導者が、ブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコと、3人立て続けに死去していった。そして、1985年に、ゴルバチョフがソ連の最高指導者に就任した。

ゴルバチョフは、それまでのソ連の指導者とは違っていた。ゴルバチョフは基本的に、非効率な経済活動に浸食されたソビエトの国内社会経済改革の必要性を強く感じていた。実際、国内社会を活性化するために、ペレストロイカ、グラスノスチといった、ある意味で自由度を許容した国内政策を進めていった。そして、国内改革を進める上で、対外戦略の負担を軽減しなかったゴルバチョフは、新思考外交を打ち出し、積極的に西側との対話、軍縮に臨んでいった。その流れの中で、1985年ジュネーブ、1986年レイキャビック、1987年ワシントン、1988年モスクワでの、歴史的なレーガン・ゴルバチョフによる米ソ首脳会談が開催され、INF (中距離核戦力) 全廃条約、戦略兵器制限交渉など、具体的な成果が生まれていった。

さらに、ゴルバチョフはブレジネフ以来の社会主義同盟諸国の国内政策等をソ連が制限する作用を持っていた「制限主権論」との決別を宣言し、社会主義諸国が自らの意志、世論で国のかたちをきめていくことを認めた。その結果、世界、特にヨーロッパの社会主義諸国で、急速に政治的には民主化、自由化が、経済的には資本主義型の市場経済化が進んだ。

1989年10月、東西分断の象徴であったベルリンの壁が崩壊し、同年12月、自由主義圏・社会主義圏間での冷戦を終結する宣言がなされた。

1991年、急速な自由化、民主化、市場経済化のうねりの中で、第2次世界大戦以降国際政治における社会主義陣営の司令塔として君臨してきたソビエト社会主義共和国連邦自体が消滅した。そして、世界の社会主義体制は一挙に消滅に向かった。

1990年代後半、2000年以降、全世界に、自由主義、民主主義、市場競争システム、資本主義がさらに急速に広がり、世界各国の経済的な結びつきが加速度的に緊密になり、地球全体が一体化していくグローバル化の時代に突入していった。

図 2：ゼミで学習した「グローバリゼーションの発展プロセスの概略」

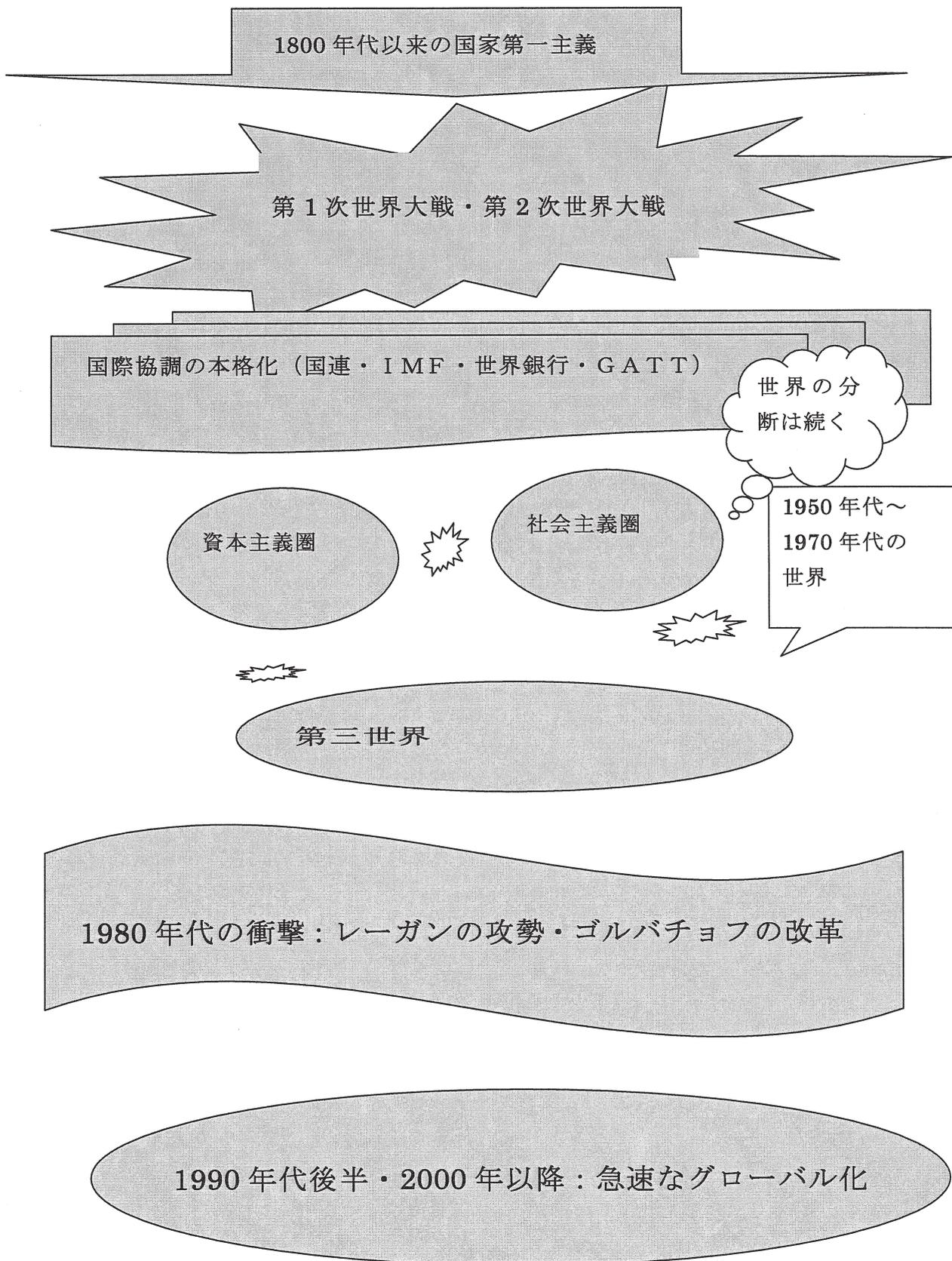


表 1：グローバル化関係年表

年代	歴史的事項
1800 年代	国家 (nation-state) の形成と台頭 国家第一主義
1914 年～18 年	第 1 次世界大戦
1939 年～45 年	第 2 次世界大戦
1940 年代後半 ～1970 年代	—国際協調の動き— ★国際連合 (UN) ★国際通貨基金 (IMF) ★世界銀行 (The World Bank) ★関税と貿易に関する一般協定 (GATT)  ↓  それでも世界の基調は「分断」 「自由主義・民主主義・資本主義 V S 社会主義 V S 第三世界」 という対抗軸
1980 年代	本格的なグローバル化への突破口が開かれた 10 年
1981 年	アメリカでレーガン政権誕生 「力による平和」の大戦略 あらゆるパワーで社会主義圏を圧倒
1985 年	ソビエトでゴルバチョフが最高指導者に就任 自由度を許容した国内政策・対外政策 ↓ 社会主義圏の崩壊へ
1989 年	ベルリンの壁崩壊
1991 年	ソビエト連邦の消滅
1990 年代後半 2000 年以降	グローバル化の急速な進展

## 1.4 グローバル化の恩恵

グローバル化は確実に、世界レベルで経済規模を拡大させていった。例えば、1989年約2000兆円であった世界GDPは、2009年約6000兆円と、グローバル化の本格的進展のたった20年間で、世界GDPが3倍に拡大した。私達は多大な恩恵をもたらしていると考えられるグローバル化の複数の次元を以下のように整理した。

表2：グローバル化の複数の次元

グローバル化	エコノミック・グローバル化	世界中の商品、資本、店、会社、工場の相互交流が進む経済的なグローバル化
	インフォメーションリレーティッド・グローバル化	世界中の情報が衛星テレビ、インターネット等を通じて伝播され、またリアルタイムで、世界中の人が、同時に共通の情報にコンタクトできるような情報面でのグローバル化
	カルチャラル・グローバル化	世界中の人が、世界中の多様な文化、ファッション、アート、音楽などの文化情報を知り、コンタクトをとれるようになる文化的なグローバル化
	エンカウンター・グローバル化	世界中の人がボーダーを越え、直接出合い（エンカウンター）、交流していくことになる。国民意識から世界市民意識が生まれる可能性がある。
	ポリティカル・グローバル化	ウェストファリア条約以来の国民国家を国際政治の基本単位とする状態から、G20に象徴されるような多数の国家間での活発な政策調整等の制度が機能していく政治的なグローバル化。国家が連合して「国家連合」を形成していくトレンドも進んでいる。事実、ヨーロッパはEUという国家連合を形成し、EU大統領という国家連合の指導者を選出するまでになっている。

## 1.5 グローバル化が引き起こす問題

私達はグローバル化の高度化はさまざまな問題を引き起こすことにもなっているという一点を、決して見逃してはならないと考えた。グローバル化の急速な進展と同時に、世界各地で相互理解の欠如、社会的調整の失敗から、地域紛争、動乱、戦争、宗教間対立、民族間対立、経済摩擦、経済格差など、深刻な問題が多発している。グローバル化は、一歩進路を誤ると、大規模な戦争すら起こしかねない要素をはらんでいる。

グローバル化は進み、世界に  
恩恵をもたらしている・・・

**しかし！**

グローバル化はさまざまな問題を  
引き起こすことにもなっている

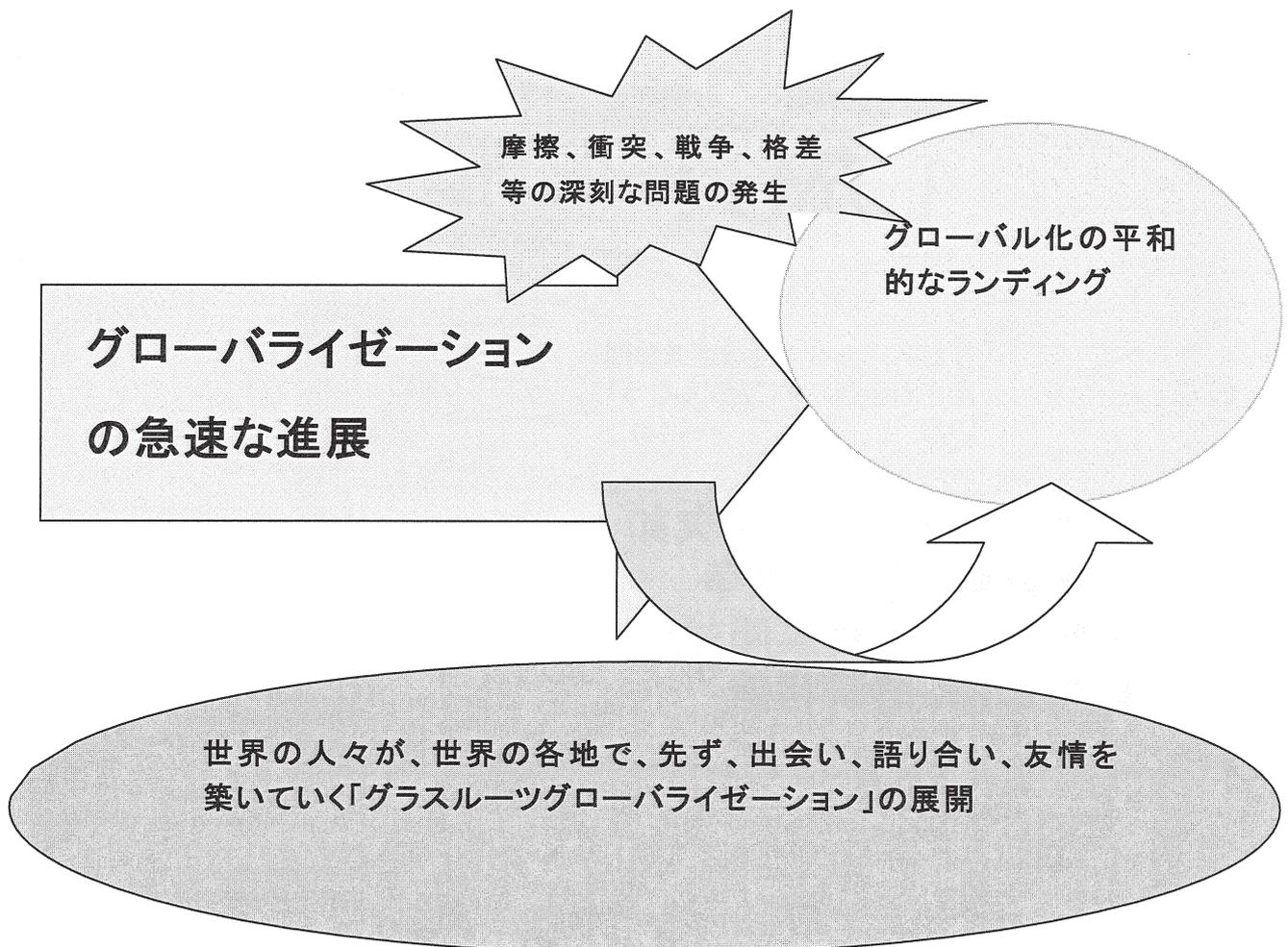
- ×各地での相互理解の欠如
- ×地域紛争、動乱、戦争
- ×宗教間対立、民族間対立
- ×経済摩擦、経済格差

## 1.6 グローバル化の平和的ランディングの手法としてのグラスルーツグローバルライゼーション

世界の全ての人々には家族があり、友人がいる。世界の人々は、誰も、紛争、衝突、まして、戦争など、絶対に望んでいない。「世界の人々が、グローバル化の中で、平和に人生を送るようになるには、どうしたらよいのか」を真剣に考えるべきである。

私達は、「迂遠なようだが、根本的には、先ず、世界の人々が、世界の各地で、出会い、語り合い、友情を築いていくことが、最も大切である。世界の各地で、グラスルーツの、草の根の、国際交流、人間交流、人間対話を、展開していくことが、グローバル化を平和的にランディングさせていくベースとなる」と考えた。

図 3：グローバルライゼーションとグラスルーツグローバルライゼーションの意義



## 2. Invite

### 2.1 中国人料理家ショウコウレイ氏を招待

6月に中国人料理家のショウコウレイ氏をゼミに招待して意見交換を行った。

- 学生：                    こんにちは。今日はよろしくお願いします。
- ショウコウレイ氏：    こちらこそ、よろしく。
- 学生：                    最初に、お聞きしたいことは、日本に来られての印象ですが、どうですか。
- ショウコウレイ：        日本の、特にこの長岡市への印象は良いと思う。なんといっても、人々がまじめで、礼儀正しく、親切です。
- 中国にいたときに思い描いていた日本人のイメージとは、まったく違う。
- 日本人は、基本的に、よく教育を受けていて、まじめで、親切だと思う。
- やはり、世界は実際に行ってみないと分からないと思った。
- 皆さんも、今思い描いている中国のイメージがあるでしょう。でも、実際に中国に行くと、新たな発見があると思う。
- 学生：                    日本や長岡について、他に感想はありますか。
- ショウコウレイ氏：    日本は、街がきれいですね。ゴミが落ちていない。
- 人々がゴミを平気で、捨てることがないんでしょう。
- それから、長岡は、緑がとてもきれいだ。緑がたくさんあるから、空気がきれいなんだと思う。
- 学生：                    なるほど。ずっと、ここに生活していると分からないことがありますよね。確かに、長岡の良さを、他の地域から来た人に聞くと必ず言われることが、山紫水明の自然なんです。自然が豊かだから空気の質が高いんですよね。特に、欧米の人は、空気、Air を重視する人が多いようです。長岡は、空間的にも、広々とした所が多いし、都市機能も十分ある。「長岡の居住環境はトップレベルだよ」ってよく言われることがあります。
- さてショウコウレイさんが、料理の道を目指すきっかけは、何だったんですか。
- ショウコウレイ氏：    そうですね。中国では、多くの若者は、とにかく、生きていくことを考えるからね。僕も、中学校を卒業するあたりで、料理も好きだったことと、料理人ならどこでも生きていけると考えたんです。
- 学生：                    中国と日本では、最初から、若者のおかれている環境が、かなり違うと思いますが、その点どうお考えですか。
- ショウコウレイ氏：    日本だと、中学校を卒業したら、とりあえず、高校に行くでしょう。高校を卒業したら、とりあえず、学校へ進学するとか、どこかへ就

職するとか、意外に明確でなく、進路を決める人が多いでしょう。それは、基本的に、豊かだからありえる発想なんです。中国では、「他に選択肢がはっきりしないから、とりあえず進学する」という発想は、多くの若者には基本的にはないと思うよね。中国は、確かに、GDP が、世界第 2 位になって、全体では、勢いもあるし、発展しているし、豊かな人もいる。でも、中国は人口が桁外れに多い。13 億人でしょう。大半の人は、とにかく、若い頃から、生きるのに必死なんです。どうやって、自分の仕事のスタイルをつかって、現実的に仕事を得て、そして、お金を得るかを、必死に考えているんです。「なんとなく生きる」なんて、絶対にはないと思う。「生きることに必死」なことが、今でも、中国の若い世代には、共通していると思う。

学生：

分かりました。確かに、日本では、「生きるのに必死」な若者というのは、あまり聞かないですよ。あるジャーナリストが、「日本は豊かさに敗れた国」だと言ったことがあります。そうかもしれない。何だかんだ言っても、一人あたり GDP が 4 万ドルの日本は、やはり豊かだと思う。日本では、体力も旺盛で働けるのに、働かない若者が、とても多くなっている。日本が貧しい時代、高度成長で今の中国のように、国全体で、追いつけ追い越せみたい時代には、働かない若者なんかいなかったと聞きます。

ショウコウレイ氏：

豊かなことには、感謝したら良い。だけど、それにおぼれたら負けだよ。日本の人は、豊かさを、芸術や、自分の内面を磨いたり、品格を上げたりすることに、使ったら良いと思う。欧米は、美術館や博物館が多いでしょう。豊かさを、社会や人間の品格を上げるために使ってきた良い例じゃないかな。日本の若者も、豊かさを自分を磨いていくことにどう使っていくかが、ポイントだね。豊かならばぜひ料理でも、一流のものに触れてほしいよね。一流の料理に触れると、やはり、自分が磨かれるよ。「人間の舌」は、一度高いレベルのものを食べると覚えるでしょう。もう次からは、レベルの低い食べ物はたべられない。「人間の舌」「人間の味覚」というのは、すごいよ。レベルの高いものを、食べれば食べるほど、味のレベルが分かる。今食べているものと、過去食べたものを、一瞬で比較するんだ。レベルの高いものを食べると、それより低い味覚のものは食べられなくなる。他も、同じだね。レベルの高いものに、触れれば、触れるほど、それより低いものは、分かってしまう。極端に言えば、受けつけなくなる。だから、できるだけ、何でも、より高いもの、より良いもの、よりレベルの高いもの、より一流のものに触れていくことが、とても大切なんだよ。料理の道は、それを教えている。

学生：

ところで、中国では、高校生の頃から、寮生活を始める人が多いと、聞きますが、本当ですか。

ショウコウレイ氏：

本当です。中国では、中学生や、高校生の時代から、多くの若者が、

通学の関係で、実家から離れて、寮に住むんです。私も、寮生活が、とても長かった。寮は、10 人部屋、20 人部屋は、あたりまえで、プライベートなんかないんだ。「皆でいつも、一緒に、寝て、起きて、食事して、勉強して」という生活なんだ。そういう環境だから、自然に、人間関係、チームワーク、コミュニケーション能力みたいなものが身につくんです。

学生： 日本では、コミュニケーション能力、チームワーク力なんかが、なかなか身につかなくて、国をあげて、社会人基礎力というコンセプトを出して進めているんです。

ショウコウレイ氏： 若い時は、特に、ありとあらゆる人と接していくことが大切です。人間は、生きてきた背景も、そこからつくられる人間性、人柄も、皆、違う。10 人いたら 10 人の人間性は違う。100 人いたら 100 人の人間性が違う。性格が明るい人もいれば、暗い人もいる。人を思いやれる人もいれば、かなり冷酷な人もいる。

また、人間は当然、多面的です。明るく見えても、実際、話してみると、かなり暗く考える面があったり。冷酷な人だなど思っても、実際に、仕事してみると、部下や他人に優しくかったりとかね。

人間はとても多面的だ。一人の人間の人格で、どの要素がかなり強いかを、よく見るんだ。明るい要素が強ければ、基本的に明るいんだろうしね。強気の要素が強ければ、基本的に強いんだろうしね。

人間にできるだけ多く接して、「人間に強く」なることだよ。中国は、『三国志』の国で、常にすさまじい外交戦、駆け引きが繰り広げられることが当然なところがある。結局、政治とか、経済活動とか、組織といっても、「人間」でしょう。全て「人間」がやっていて、全て「人間」でできているんだから。例えば、どうしても関係をつくりたい取引先とか、お客さんなら、「その人の心をつかめるかどうか」でしょう。敵対したり、つぶさなければいけない相手なら、「その人の心に、どう恐怖を与えたり、つぶすか抑え込むか」でしょう。「人の心」に強くなることだね。人生は戦いだよ。体験が大切だ。少しでも、一歩でも人に触れることだよ。

学生： ところで、料理における日本と中国の違いについては、どうお考えですか。

ショウコウレイ氏： 日本に来て、料理の点で、一番、勉強になったのは、第 1 に、日本料理での素材そのものを、何の加工もしないで出すという、すごさですね。お寿司、刺身なんかは、その典型でしょう。新鮮な魚を、選び抜いて、そこに、一挙に、包丁を入れて、出す。実は、包丁の入れ方で、味は全くちがってしまう。日本料理は、確実に、世界に誇れるものだ。

学生： 中国の料理の特徴は、どのようなところにありますか。

ショウコウレイ氏： そうだね。中国の料理では、味付けに、ウェイトをかけている。素

材も、良い素材を選ぶんだが、やはり、勝負所は、味付け、調理方法にあると思う。それと中国料理は、とにかく、多くの、素材を使う。肉でも、日本で普通に食べるのは、牛、鳥、豚でしょう。中国では、それにプラスして、羊、馬、ヤギ、食用の犬、蛇、クマなんかうまく調理される。

学生： クマの手を食べることができるのは、金持ち、権力者の証拠、ステータスシンボルみたいなものだ、習ったことがあります。

ショウコウレイ氏： 中国では何十種類の料理を、ゆっくり、一日中かけて、食べるスタイルもある。

学生： 中国料理の世界を知ると、確かに、中国の文明の深さ、偉大さが分かる気がします。

ショウコウレイ氏： そうなんだね。僕も、世界中の料理を、勉強してきたが、料理というのは、その国、その文明の長さ、深さのようなものを表わす面があって興味深いんだね。

学生： 世界のステートディナーなんかは、フランス料理ですよね。最初に、ドンペリニオン、ボランジェなんかのシャンパンを優雅に飲んで、アピタイザーとして、オードブルが出て、スープ、魚料理、肉料理、デザート、デミタスコーヒーという流れです。

ショウコウレイ氏： 格式、優雅さ、雰囲気点では、フランス料理はレベルが高いと思うよね。フランスという、王侯貴族の宮廷文化が高まった歴史の反映かもしれないね。

学生： イギリスはどうですか。

ショウコウレイ氏： そうだね。よく、「チップ&フィッシュ」なんて言う人がいるでしょう。でも、イギリスにも格式ある料理文化があるよ。

学生： ショウコウレイさんの話を伺っていると、何だか、夢が広がってきます。私達も、これから、いろいろな機会をつくって自分を磨いていくように努力していきたいと思います。

中国人料理家ショウコウレイ氏を  
ゼミに招待し交流しました。



## 2.2 フィリピン人エンターティナー ポール＝イルデファンソ氏を招待

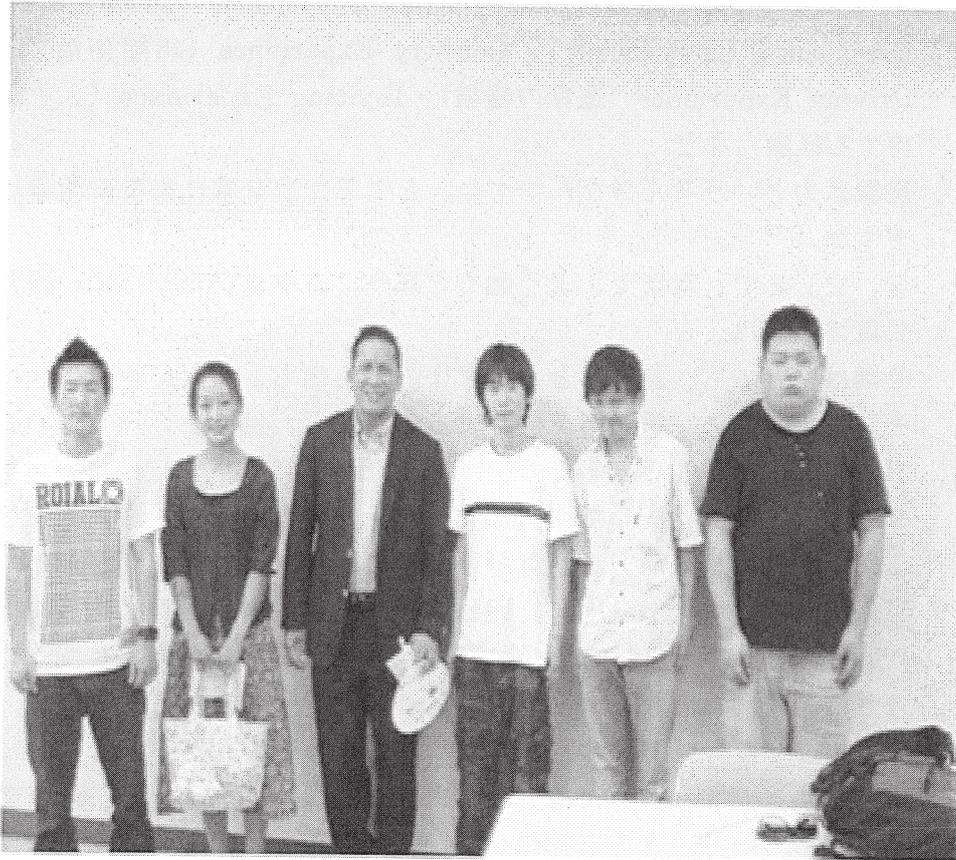
6月にフィリピン人エンターティナーのポール＝イルデファンソ氏をゼミに招待し交流しました。

- 学生： ようこそ、いらっしゃいました。よろしく、お願いします。
- イルデファンソ氏： こちらこそ、よろしく。若い皆さん方と、対話できることはうれしい。いつの時代も、社会や、時代をつくるのは、若者だ。日本も、フィリピンも。
- 学生： 私たちは、ゼミでフィリピンについて、勉強してきました。先ず、フィリピンのナショナルヒーローについてですが、ホセ＝リサール先生は、スペインからの独立の英雄で、フィリピンでは最も知られていますよね。
- イルデファンソ氏： ホセ＝リサールは、全てのフィリピン人が大変に尊敬している大恩人です。フィリピンは、かつて、スペインの植民地だった。スペインからの独立運動があった。ホセ＝リサールは、その指導者だった。彼は独立闘争のさ中、処刑される。しかし、彼の死後、フィリピン民衆の独立運動は続き、ついに独立を勝ちとる。ホセ＝リサールの無私の生き方、使命に生きる生きざま、そういったものが伝えられている。
- 学生： 分かります。国民や、若者にとって、生き方の模範を示すような影響力をもつ人物、国民の精神的支柱のような人物が大切だし、そのような人物を明確にしている国は強い気がします。
- イルデファンソ氏： 僕も、そう思う。国家といっても、社会といっても、突き詰めれば、全て、人間でできている。つまり、人間の生き方で、できているんだ。だから、その人間の生き方に大きな影響を与える、精神的支柱が必要なんじゃないかな。
- 学生： フィリピンでは、ホセ＝リサール。キューバでは、ホセ＝マルティ。中国では、周恩来先生。アメリカでは、リンカーン。イギリスでは、チャーチルですか。フランスでは、ドゴールやビクトル＝ユゴー、ナポレオン。ところで、日本でのエンターティナーとして仕事をしてみても、どんな感想を持っていますか。
- イルデファンソ氏： とても、楽しく仕事をやらせてもらっている。日本人は、今までとても、まじめに働いてきた。これから、それにプラスして、「楽しむ」ということが、ライフスタイルのキーワードになるんじゃないかなって感じている。
- 学生： 確かに、日本人のライフスタイルは、かなり、変化してきてますよね。若い世代なんかでも、自分らしく、個性的に、生きていく人が多い。若者のモビリティも小さくなっているとか。良い悪いじゃな

- く。元来、楽しむって一番大切なことじゃないですか。
- イルデファンソ氏： そうだよね。人生、生きることは、戦いだし、使命、闘争、努力、目標を掲げて前進するということが中心であって良い。でも、それにプラスして、やはり、質の高い「楽しみ」が大切だよね。そのプロセスで、実は、自分が磨かれるところがあるんだ。
- 学生： おしゃれとか、高級な食事とか、持つものでも楽しんでこつていくと、確かに、自分に洗練さが、加わっていきますよね。ところで、エンターティナーとしてカスタマーに、楽しんでもらうためには、どのようなことが、ポイントになるんですか。
- イルデファンソ氏： 最高の質問ですね。一番のポイントは、心をつかまなければいけないということです。これは、全ての、ビジネスや、人間関係に、共通でしょう。「心をつかめるかどうか」なんです。私は、歌や、トークをやるが、心をこめてやっている。そして、やっぱり、「笑顔」です。カスタマーには、とにかく、一瞬一瞬、「笑顔」を向けているかどうか、注意している。表情って、大きいですよ。どんな顔立ちが良くても、表情が豊かじゃないと、良く見えない。笑顔とか、表情が良い人は魅力的に見えるんです。
- 学生： フィリピンと日本の違いについては、どうお考えですか。
- イルデファンソ氏： フィリピンと日本の一番の違いとして感じたのは、「家族」ですね。フィリピンでは、基本的に大家族なんです。とても、家族を大切に、仲が良い。日本では、良い悪いという意味ではないのですが、かなり家族が、極端にいてない場合も、多くなっていることに驚きます。
- 学生： そうですね。確かに、日本では、単身世帯が、どんどん増えている。一人で生活する人が、ますます増えると予想されます。家族を有しないライフスタイルなんですね。何となく束縛、管理が強かった日本社会の反動ではないかと言う人もいるのですが。
- イルデファンソ氏： そういう面もあるかもしれないね。確かに、ライフスタイルは多様化している。生き方、家族のあり方も、もっともっと変化していくことでしょう。ただ一点だけ忘れてはいけないことがある。皆さんが、こうして立派に大学生として勉強できるまでになっているのは、家族があったからということです。皆さんには、立派な家庭があった。だから今日の皆さんがある。
- 学生： 分かりました。家族への感謝は絶対に忘れません。今日は本当にありがとうございました。

フィリピン人エンターティナーのポール＝イルデファンソ氏をゼミに招待し、フィリピンにおける伝統的な温かい家族のあり方などを教わりました。





### 2.3 アメリカ人ビジネスパーソン スコッティ=ジロッド氏を招待

7月にアメリカ人ビジネスパーソンのスコッティ=ジロッド氏をゼミに招待し交流しました。

学生： よろしく、お願いします。とにかく、アメリカは、何だかんだいっても、世界の若者には、一番人気がある国です。

ジロッド氏： 何でも、聞いて下さい。

学生： 先ず、ジロッドさんが、日本に来られるようになったきっかけは、何だったんですか。

ジロッド氏： 2008年のリーマンショックがあったでしょ。アメリカ経済が揺れたこともあってね。僕のホームエリア、アリゾナ州でも、経済が悪化して、皆、失業した。僕は、大きな会社に勤めていたんだが、いろいろあって、今度は、外国に行ってビジネスを経験しようと思ってね。それで日本に来たんだ。

学生： 経験ですか。

ジロッド氏： そうなんだ。経験が大切なんだよ。アメリカの若者は、とにかく経験を重視しているよ。Experience（経験）に関して、アメリカの若者は、こんな

言葉をよく使うよ。例えば、International Experience（国際的な経験）・Global Experience（地球的スケールでの経験）・Business Experience（ビジネスの経験）・Political Experience（政治的な経験）・Academic Experience（学問の経験）・Country Experience（田園生活の経験）・Driving Experience（運転の経験）・Inviting Experience（人を招待、接待する経験）など。

学生： 経験は力という考え方なんですね。ところで、日本に来ての印象は、どうですか。

ジロッド氏： 皆、まじめで、親切で、よく働くと思う。日本は安定したよい国だ。

学生： 長岡の印象は、どうですか。

ジロッド氏： 長岡は、とても、美しいところだよ。山も緑も、川も、本当にきれいだ。そして、劇的に、季節が、変化するでしょう。世界を、知っている人からしたら、住むところとしては、ベストなエリアの一つじゃないかな。アメリカ人なんかは、決して、大都会には、憧れないんだ。長岡のような、先ず、自然環境が抜群で、空気がきれいで、広々とした空間があって、静穏が保障されるカントリーに、憧れるんだ。カントリーライフという言葉もあるけど、アメリカでは、大富豪や、成功した人は、皆、長岡みたいな、自然に囲まれたカントリーエリアに、住んでいるよ。

学生： カントリーライフですか。アリゾナは、どうですか。

ジロッド氏： アリゾナは、アメリカでも、独特かもしれないね。かなりのエリアを、砂漠が占めている。とても乾燥している。西部劇に出てくるような、サボテンがあって、砂地が広がっている光景なんだ。夏はとても暑い。気温は40℃くらいになる。でも、アリゾナにも山岳地帯があって、そちらは寒いよ。

学生： 若者のライフスタイルでの、日米の違いについてはどうお考えですか。

ジロッド氏： 日本に来て驚いたのは、高校を卒業しても、親元にいる人がとても多いことだ。大人になっても、親と一緒に生活している若者がこんなに多いのかと驚いた。

学生： アメリカでは、若者はどうですか。

ジロッド氏： アメリカでは、若者は高校を卒業したら、親の家から出るのが基本だ。高校卒業後の人生は、皆、自分の力で生きようとする。地元の大学に行く人もいるし、遠方の大学に行く人もいる。自分で、アルバイトして、奨学金も借りて、大学に行って、勉強して、力をつけていくんだ。一言で言えば、若者に「独立心」がある。日本の若者は、親に依存しすぎるんじゃないかな。人生は、結局、一人で道を開いていくしかないんだよ。誰かを、頼っているうちは、どうしても、たくましくなれない、強くなれない。アメリカの若者は、勝つことを、たたきこまれる。人生は、結局、勝たなければだめだとね。

今、アメリカで、福祉を充実してる。良いことでしょう。誰も、文句なんかはないと思うよね。でも、どう。ティーパーティーが、反対している。政

府にやたら頼るなってね。ティーパーティーは、すごい勢いがあるでしょう。かつて 1970 年代までのアメリカも、かなり福祉に力を入れて、それはそれで意義があったんだろうけど、やっぱり反対が起きた。「フリーランチ」と批判された。働きもしないで、食べるなってね。つまり、アメリカの根本的精神の一つは、やはり「独立心」なんだ。自分で力をつけて、自分で生きていく。全て自分で決まると思っている。強いよね。依存しすぎること拒否感がある。

でも、他人を助けないということじゃないよ。自分が強くなって、勝って、力をつけたら、人を助けるんだ。激励するんだ。国家に尽くすんだ。それが一流の振舞、生き方と、考えられている。アメリカはドネートの文化がすごいでしょう。皆、寄付するよね。人に尽くすことを忘れない。人を励ますことを忘れない。アメリカ人の良いところじゃないかな。これは宗教から来ている部分がある。慈悲、愛、思いやりとかを教える宗教の影響力は大きいよ。

学生： 日本では、ニートとか、学校を卒業しても、働かず、親に小銭をもらって生活している若者が、たくさんいます。

ジロッド氏： そうらしいね。でも、おかしいよ。若くて、体力もあって、精神的に旺盛な時に、働かないなんて。失礼だけど、日本は、豊かさに敗れた面があるよね。教育を変革しなければ。教育って、こわいよね。国も人間でできているからね。

学生： ビジネスについては、どうお考えですか。

ジロッド氏： ビジネスという言葉への、反応が日米で違うよね。日本の若者は、ビジネスという言葉に、まあそこそこの感じでしょう。アメリカの若者にとって、ビジネスっていう言葉は、とても好かれている。プロフェッショナルというか、洗練さというか、高級感、戦闘的な、何ともいえない、魅力的な響きがある言葉なんだね。だから、アメリカの若者の多くがビジネスの世界に飛び込むんだ。

学生： アメリカで、若者が大学を卒業して進む方向のナンバーワンはビジネスで、将来的に自分のビジネスをオープンすることを目標にする夢をもつ人がとても多いと、聞いたことがあります。本当ですか。

ジロッド氏： 本当だ。私も含めて、私の友人のほとんどが、ビジネスの道に進んでいる。アメリカは、民間企業による自由市場競争経済が、国家の根幹だからね。当然だと思う。

学生： 政治については、どうですか。

ジロッド氏： 政治については、アメリカでは、どこへ行っても、関心はあるし、よくみているよ。草の根なんだね。デモクラシーだ。2008 年の大統領選挙も、オバマを草の根の運動が応援して、当選させてしまった。すごいと思うよ。

学生： 日本の政治については、どう思いますか。

ジロッド氏： 制度に問題があるんじゃないかな。日本はとにかく変化しないよね。大胆に変化しないのが、日本の政治の特徴かもしれない。でも、それは、日本

人の責任じゃないと思うよ。やはり、基幹的な制度の問題じゃないかな。アメリカは大胆なポリティカルアポインティの制度を可能にする独自の大統領制で政治が動いている。皆で大統領を交替できれば、一挙に、スタッフを入れ替えてしまう。大統領に影響を与える上級スタッフは議員でなくてもよい。民間企業のビジネスパーソンや大学教授でもよいんだ。とにかく大胆にスタッフを変えて政策の方向を変えることができる。

学生： 変革できるシステムがあるから、心配ないと。

ジロッド氏： そうなんだ。アメリカには、行き詰まりはない。国家的な復元力がある。

学生： アメリカのビジネスパーソンは、将来の世界を、どう見えていますか。

ジロッド氏： ビックピクチャーな質問だね。

学生： たとえば、中国の台頭とか。

ジロッド氏： ここにも、中国からの優秀な留学生がいるね。中国は、すごい国だよ。偉大だ。アリゾナでも、どんどん、中国製品が、使われるようになっていく。アメリカのビジネスパーソンは、基本的に中国には、東洋の神秘的な国として魅力を感じる部分がある。アメリカには、400年くらいしか、歴史がないでしょう。アメリカ人は、歴史の長さ、深さ、文明の深さに憧れるところがあるんだ。ビジネスパーソンは、もちろん、中国のグレートマーケットに注目している。中国の中流階級人口、つまり、先進国並みの消費者で、電化製品、コンピュータ、クルマなんかを買う人口だけど、何と、4億人でしょう。これは、アメリカの中流階級人口より、もう多いんだ。世界のビジネスパーソンが、注目しないわけないよ。

学生： 国際政治的には、どうですか。

ジロッド氏： 僕は、ビジネスの人間で、国際政治は、見当がつかないが、一般的に言われているのは、中国はアメリカにとって最大のライバルになるということだね。

学生： 確かに、G2論、パックスサイナアメリカナ、チャイメリカ、なんて言葉が出てくるくらい、中国の存在感は大きい。

ジロッド氏： そうだね。アメリカのGDPは、約14兆ドル、中国のGDPは、約5兆ドル。でも、拡大のスピードは、アメリカが、年間約0.3兆ドルなのに対して、中国は、年間約1兆ドル拡大している。この勢いでいくと、2020年にはGDPで、アメリカと中国は、確実に拮抗する。

学生： 中国は、軍事力、外交力、教育力もある。文明がつけあった歴史力もある。かつてのアメリカのライバル、ソビエトは、軍事力、諜報力なんかは、抜群だったが、経済力や、ソフトパワーでは、それほどでなかった。だから、アメリカが勝利した。でも、今度の中国は、違いますよね。アメリカ史上、最大のライバルでしょう。

ジロッド氏： 衝突は、誰も望まないよね。米中関係は、これからの最大の国際政治のテーマになるでしょう。平和的なランディングをどう実現するかでしょう。それこそ、君たちが訴えるグラスルーツグローバリゼーションが大切になってくるんじゃないかな。アメリカと中国も草の根レベルでどンドン人

間が出会って、語り合って、友情を築いていけば、うまくいくと思う。  
グラスルーツグローバルイゼーションが本当に重要になってくるね。

学生： 私たちの活動の意義を賛嘆していただいて、ありがとうございます。自分  
たちなりに、これからもがんばって行きたいと思います。

アメリカ人ビジネスパーソンのスコット・エイ＝ジ  
ロッド氏を招待し、アメリカの経済状況、教育、  
文化等について、語り合いました。



スコッティさんには、日本のお茶を楽しんでもらいました



### 3. Visit

#### 3.1 ニッコーインターナショナル主催の「オクトーバーフェスト」へ参加

9月にニッコーインターナショナルが開催した「オクトーバーフェスト」に参加しました。

学生： 今日、オクトーバーフェストに参加できて、光栄です。

ネルソン社長： こちらこそ、よく来てくれました。

学生： オクトーバーフェストとは、どんな催しですか。

ネルソン社長： 元来、オクトーバーフェストは、ドイツのミュンヘンで、収穫を祝いあって、開催されていたものです。ビールや、ソーセージ、ハムを食するパーティーです。アメリカは、実は、ドイツ系が一番多い。だから、当然、アメリカで、ドイツと同様に、オクトーバーフェストが開かれるようになった。今のアメリカでは、オクトーバーフェストは、ほとんどの人が知っている。全米中で10月を中心に、盛大に開催される。

学生： そのオクトーバーフェストを、日本で、開催した理由は。

ネルソン社長： 皆に、世界の文化を知ってもらいたいと思った。世界には、まだまだ、お互いに、知らない文化がたくさんあります。お互いに、文化を少しでも、知っていくことが、相互理解だし、長い目で見れば、世界平和に連動するんだ。

学生： 確かに、お互いに、知らない、交流しない、対話しないということは、結局、不信になる。

ネルソン社長： そうなんだ。ほとんどの人間や、国家は、結局、対話を、交流をしていけば、完全じゃなくても、分かりあえると思うよ。一歩でも、二歩でも、対話だよ。うちの会社の役割も、そこにある。

長岡で開催されたドイツのお祭り  
「オクトーバーフェスト」に参加



「オクトーバーフェスト」を  
開催したドミニク＝ネルソン氏





### 3.2 長岡市国際交流センター「地球広場」を訪問

12月に長岡市国際交流センター「地球広場」を訪問し、大隅一氏から長岡市の外国人の方の様子、地球広場の活動等について学びました。

学生： 長岡の国際交流の司令塔である「地球広場」のことを勉強したいと思います。よろしくお願いします。

大隅氏： 長岡市には58ヵ国から2300人の外国籍市民の方が住まれています。留学であったり、研修であったり、また、日本人の方と結婚している方など、いろいろな形で長岡に来られています。長岡はどんどん多国籍化、グローバル化していますよ。

学生： 地球広場では、どのような活動をしていますか。

大隅氏： 外国籍市民の方への日本語学習支援や、外国籍市民の方と日本人市民の方との交流イベント等を開催しています。世界の一つ一つの国を紹介するイベントも進めています。最近では、マレーシア・ベトナムのことを知ってもらうイベント、ブータンを紹介するイベントを開きました。来週はモンゴルの紹介をします。紹介する国の人実際に来て語ってもらうので、とても勉強になるんです。

学生： この地球広場を中心に、長岡の国際交流がどんどん発展していくのですね。このような国際交流を進めるセンターは、県内の他のエリアにはあるのですか。

大隅氏： 意外に少ないようです。国際交流を本格的に進めるためのセンターを有しているのは、長岡くらいじゃないかな。国際交流、世界への開放性という点で、長岡は進んでいると思います。

学生： 長岡のグローバル化という点で、今後どのような変化が予想されますか。

大隅氏： 最近では長岡に定住してくれる外国人の方が増えています。中国や韓国からやってきて、長岡でお店を出して成功する人も出てきています。これは新しいトレンドじゃないかと思っています。

学生： 日本はこれからますます人口減少が進み経済も縮小傾向の危機にあります。世界から、人、モノ、資本などを徹底的に入れていく大開放戦略をとるしかないと思います。長岡が大開放戦略の先進地域になり、世界に開き世界の人々を受け入れ発展して行くことを願っています。

### 国際交流センター「地球広場」を訪問し大隅一氏から学ぶ



「地球広場」では外国籍市民の方への日本語学習支援を行っている



「地球広場」では世界の国々を紹介するイベントを開催している



#### 4. Donate

10月末の長岡大学の悠久祭において、世界への寄付金を得る目的で、ハイグレードバーというお店を出店した。ハイグレードバーでは、グローバルな雰囲気を出すために、イタリアのガリアーノ、アメリカのメーカーズマーク、ワイルドターキー、イギリスのフォートナム&メーションなどを出した。その中でも、特に、イタリアのガリアーノは、世界の映画の数多くのシーンで出されるほどに洗練されたフォームをしたボトルに、独特のフェーバーをたたえた最高のリキュールで、一番人気があった。

ハイグレードバーで得た収益金の寄付について、ゼミで話し合った結果、世界の子供たちを応援しようということになり、ユニセフに寄付することになった。ホテルニューオータニ長岡が、ユニセフとの仲介を行っていたので、そこで寄付金を贈呈した。

悠久祭でハイグレードバーを出店し、  
利益をユニセフに寄付しました





## おわりに

グラスルーツグローバリゼーションの活動を通じて、私達は多くのことを学んだ。グローバリゼーションは、世界経済全体の拡大など、多大な恩恵をもたらす一方で、経済格差、経済摩擦や、また文明間、各国間、各民族間等での相互理解の欠如からの摩擦、紛争、動乱、戦争など、深刻な問題も惹起させることを知った。今後ますます高度化するグローバリゼーションを、平和的にランディングさせるには、世界の各地で皆が出会い、語り合い、友情を築いていくことが大切だと考えた。そして、世界の各地の草の根・地域で、世界の人々が出会い、語り合い、友情を築いていくことを、グラスルーツグローバリゼーションと定義した。グラスルーツグローバリゼーションの具体的な活動として、「Study・Invite・Visit・Donate」の方法論も確立することができた。

Invite・Visitの活動の中で、外国人の方と直接対話した経験は大きかった。私達は、自然に、国籍、民族などが違っても、皆、友情と幸せを求める同じ「人間」であり、誠実に対話、交流していけば、素晴らしい人間関係が構築できることを体得した。そして、人間性豊かな交流の拡大こそが、グローバル化を平和的にランディングさせ行く底流となることを確信した。私達は今年度の活動のまとめとして次のようなメッセージを考えた。

アメリカのオバマ大統領は、「黒人のアメリカも、白人のアメリカも、ラティーノのアメリカも、アジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ合衆国だけだ」と訴えました。私たちは言いたい。「日本人の世界も、アメリカ人の世界も、中国人の世界も、アラブ系の世界も、アフリカ系の世界もない。あるのは世界であり、世界市民だけだ」と。

## 謝辞

最後に、私達のグラスルーツグローバルイゼーションの活動に、貴重なお時間を割いてご協力して下さった方に感謝申し上げたい。特に **Invite** の活動において、中国人料理家のショウコウレイ氏、フィリピン人エンターティナーのポール＝イルデファンソ氏、アメリカ人ビジネスパーソンのスコッティ＝ジロッド氏には、お世話になった。**Visit** の活動では、**Nikko International** 社長のドミニク＝ネルソン氏が開催して下さったオクトーバーフェストに参加できた。また、長岡市国際交流センター「地球広場」の大隅一氏には、長岡市の外国籍市民の方の様子等について伺うことができた。お世話になった全ての方に心より感謝申し上げたいと思います。